



太陽系ガイドブック —100億キロの旅—

寺門 和夫 著

丸善株式会社, 2,000 円 + 税

読み物

お薦め度
☆☆☆☆★

小冊子「太陽系ガイドブック」は、冥王星を除けばほぼひと段落ついた NASA や各国の行った太陽系の惑星探査によって明らかになった各惑星とその衛星の特徴を、各探査衛星とその衛星が撮影した神秘的に満ちた惑星の写真をもとに交えながら紹介した 100 ページ程の B6 版のお手軽なハンドブックである。本書は理科年表読本の体裁をとっているものの、本家理科年表のように、専門家以外にはほとんど意味不明な数字が羅列されている、一般の人はまったく取っ付くことのできない本とは正反対に、好奇心に満ちた小学生から、日頃は宇宙なんか興味はないが、人類史上はじめて各惑星の映像がテレビで放映された当時のホットなときめきだけはもう一度と思っている人、隅に追いやられぎみの地学教育で欲求不満な高校生まで、広い世代に渡って十分気楽に読める、極めて簡素だが強烈なインパクトをもった写真の説得力だけで、絶えることなくロマンティックな想像をかきたたせられる内容となっている。

構成は、太陽から始まり、水、金、地、火、木、土、天、海、冥の順に、各惑星のスケール、軌道、自転周期、公転周期、構成物質、気温を簡単に説明した後、その惑星を明らかにした人工衛星とその衛星が撮影した様々な写真から、惑星の特色を最もよく表していると思われるものを選んで掲載している。その他、代表的な小惑星や彗星も紹介されている。しかし、最も大事なことは、細かいデータを読取るのではなく、百聞は一見にしかず、まずはこの圧倒的、驚異的、神秘的な太陽系の「証拠」写真をじっくり眺めることにある。説明もなにも必要無い。なぜなら、すべては誰もが始めて見て接する風景である。どう思うか、どんな意味があるのかはこれからの私達が決めてゆくことなのだから。そ

ういう意味で、この本は、赤ん坊が、目に移った物にふれようと弱々しい手を伸ばしているかのように、人類が宇宙に覚醒し、具体的に乗り出そうとしている劇的な歴史そのものを表しているといってもよいかもしれない。

それにしても、本書のようにせーので惑星の表情を比較してみると、いかに各惑星や衛星が個性的かが一目瞭然となる。灰色でクレーターだらけの水星に、硫酸の雲の舞う灼熱の金星、赤茶けた砂漠のつづく火星に、輪と猛烈なガス流で縞模様もつ土星と木星、真珠のような乳青色と深青色（本当は実物とちょっと違うが）の天王星と海王星。2 連星であることが判明した冥王星。各惑星の衛星に至っては、二つとおなじ色、形態をしたものはない。その形成、生い立ちに想像を巡らすと、太陽系の 45 億年の歴史に各星の数をかけた分の時間が一気に頭を駆け巡る思いで幻惑されてしまうのは私だけだろうか。しかし、その中でかえって浮き立つのが、地球の生命を持つ星としての美しさが希有であると同時に、多くの惑星の一つでしかないという平凡性という相反する姿である。地球以外の惑星を知ることは、単に科学的な知識が増えるというだけでなく、地球発ではない新しい視点を会得し、地球の存在の意味を改めて認識することではなからうか。そんな筆者の思いが、本書の最後に掲載されているボイジャーが送信してきた太陽系全体の俯瞰写真に現れている。闇にけし粒のように光る惑星達。ついに人類は地球という宇宙の最小構成員から一つ広がった、太陽系という単位で宇宙に参加できるようになったという喜びと同時に、自分達はそのスケールで責任を負うことを宣言しているように思えてならない。

三代木伸二（東大宇宙線研）